中国新聞 2022年9月25日 日曜日 ワイド備後 地方 21ページ

ニュースズーム

市の初動対応に疑問の声

府中の湧水処理場から重金属流出

府中市荒谷町の湧水処理場から重金属を含む汚泥が近くの出口川に流出した事故で、市の初動対応に疑問の声が上がっている。住民への周知のタイミングや方法、処理を委託した業者の監督などについて市議の一部から問題視する発言が相次いだ。下流では事故後に川魚が大量死したが、関連は調査中だ。専門家は、健康リスクを否定できない場合は、迅速に広く住民に事故を周知する必要性を指摘している。

（野平慧一）

「事故後、下流域の住民たちにすぐ周知したか」「委託業者との連絡や設備の管理体制に不備はなかったのか」。今月8、9日にあった市議会（定数19）定例会の一般質問では市議3人が市側の対応を問うた。市の住民への周知は限定的で、事故を防ぐためのセンサーは1年前に故障していたが、市は把握していなかったことが分かっていた。

答弁した村上明雄副市長は「最悪の事態を想定した対応は危機管理の鉄則」とした上で「科学的な知見に基づいた健康リスクについて正しい理解と知識を伝えていく必要があると判断した」と説明。

「事実を早急に伝える方がいいのか、健康リスクも合わせて伝えるべきか、タイミングや内容、伝達の方法を整理している」と繰り返した。

重金属を含む汚泥が流出する事故が起きた市の湧水処理場

事故は8月23日午前9時半ごろ、近くの事業所から「河川の水が赤い」と市に通報があり判明した。処理業者は同9時ごろ流出に気付いたが、市への連絡は1時間後。重金属を含む汚泥を沈殿槽から貯槽に移す際、貯留量をオーバーして約1・6立方㍍分の汚泥が出口川へあふれ出た。貯槽内の汚泥に含まれる重金属の濃度は不明で、市は「今後調査する」とする。

処理場の下流には、井戸水を生活用水として利用する住民や水田に川の水を引く農家もいる。市が処理場がある荒谷町の町内会長に事故の発生を伝えたのは、午後2時半ごろ。川は同町の外にも流れているが、ほかの町内会には連絡していない。

養魚場で大量死

ホームページで事故について掲載したのは事故から2日以上が経過した後だった。処理場と下流域で事故当日の8月23日から26日まで水質検査をした結果、いずれも環境基準値未満で「井戸や農業など生活に影響はない」としている。

ただ、出口川の水を引く近くの養魚場では、事故当日にヤマメ35匹、事故5日後にニシキゴイの稚魚約1万5千匹が死んでいるのが確認された。1986年にも同養魚場のコイが大量に死亡し、出口川の重金属汚染が判明している。

事故の発生を翌日の報道で知り、市側から連絡はなかったという養魚業者は「20年以上かけて育ててきた財産を一瞬で失い、これからどうしていいか分からない。事故との関連は分かっていないが危険性があるのなら早く知らせてほしかった」と肩を落とす。

周知に遅れ「住民の命に関わる問題」

湧水処理場のそばを流れる出口川に流出した汚泥とみられる茶褐色の泥（8月23日午後5時45分）

原因分析進める

市は事故の原因は、設備の故障と人為的なミスと説明。原因分析と再発防止策▽市と委託業者間の設備点検や運転管理の役割分担の明確化▽事故後の初動対応▽市民への周知のタイミングなどを11月までにまとめて市民や議会に報告するとしている。

行政の危機管理に詳しい日本大危機管理学部の鈴木秀洋准教授（危機管理行政法務）は「被害と事故の因果関係が分かった後に対応しても、取り返しがつかない。健康リスクの可能性がある事実を速やかに広報し、住民が回避行動を取れるよう逐一情報を提供するべきだった」と強調する。

住民の生命と身体の安全確保に努める義務を負う行政には、被害の予防原則による対応が求められるとし「住民の混乱を理由に広報を遅らせることは住民の命に関わることと認識するべきだ」と指摘している。

クリック

出口川の重金属汚染 1986年、府中市荒谷町の砕石場跡地の下流にある養魚場のコイが大量死し、出口川の重金属汚染が判明した。88年に市が跡地のそばに湧水処理場を整備。湧き水に含まれるカドミウムなどの重金属と水を薬剤で分離し、環境基準値未満に処理して川に流している。